

# 真宗大学開学の精神

## 延 塚 知 道

延塚です。今学会長からご紹介がありましたように、本年は真宗大学が開校されましたから百年目にあたるということ、記念の行事等々が行われている最中であります。大谷大学の真宗学で学ばせて頂いている者として、今日は新しいことは申せませんが、記念の年ですから、改めて清沢先生の大学にかけた願いを尋ねたいと思います。それによつて、これからの私たちの学問の姿勢、あるいは大学がどのような方向で進んだらいいのかということを考えていきたいと思っております。

開校の辞の「他の学校とは異なりまして」ということにつきましては、例えば慶應義塾大学、同志社大学、あるいは当時の帝国大学等々について、少し考えた原稿がこれまでにあります。今日はそれとは違った方向から考えてみたい、特に大学ということでありますので、学問の姿勢という視点から、開学の精神を尋ねてみたいと思つて、こういうテーマを掲げさせて頂きました。それで、講演と言いましたけれども、講演というよりも学会発表でありますので、少し堅いお話になるかもしれませんが、ご容赦願います。資料を一応準備しましたので、その資料に沿つてお話しさせて頂きたいと思ひます。

明治三十四年の十月十三日に東京の巢鴨の地に真宗大学は開校されますが、その「開校の辞」の中に、

就いては本学は今日こゝに始めて開設したのではなく、元京都にありましたのを此処に移して校舎のみ新に建築したものであります。

〔清沢滴之全集〕法蔵館・八・三五四

という、言葉があります。したがって真宗大学は、もともと京都にあつたものを東京に移築開学したと言うのが正しいのです。だから明治三十四年に東京に移転したものを、なぜあえて「開学」と言うのかということについて、様々な議論もされてきました。未だにそれは、おかしいではないかというような疑問を呈する方が、学内にもいらつしやるわけであります。したがってその辺から今日は、少しずつお話をしてみたいと思います。

明治二十七年といいますと、清沢先生は結核の病に倒れまして垂水で療養中であります。その時、実際は明治二十六年ですが、清沢先生の親友で文部省に勤めていた沢柳政太郎氏を招聘して、大谷派宗門の学事機構を見直そうとする革新的な動きが始まります。それに参加したのは清沢先生を始め、井上豊忠、清川円誠氏等々の宗門のエリートたちです。

それはひとつは国家の動きと連動していることは言うまでもありません。例えば明治二十八年の五月の内務省訓令第十二号では、教師、つまり私たちの教師資格ですね。僧侶となるためには尋常中学以上の学力を必要とするという訓令が出されます。当時の沢柳政太郎氏は文部省に勤めていた人で、そういう国内の動きはよく分かっているわけです。当然明治二十八年くらいにそういう訓令が出るということくらいは、前もって知っているわけです。ですからそれに先だつて、宗門の学事を整えなければならぬという事情もありまして、清沢先生を始めとする革新的な人たちが、学事の振興と、学事の体制を整えるという動きが始まります。そしてその動きに連動して本山はこの明治二十七年に尋常中学よりも上の、つまり宗門で言えば最高学府として、大学寮というものをしっかりと明文化しなければいけないことになるわけです。その「大学寮条例」の第一条には、

第一条 大学寮ハ派内ノ僧侶ヲシテ深く宗余乗等須要ナル学科ヲ研習セシメ教導ノ重任ヲ尽スニ足ルベキ知徳ヲ

と、あります。要するに、宗門の最高学府である大学寮をこれから設置します。その大学寮は宗乗余乗、つまり真宗学・仏教学をしつかり勉強して、それを教化していくような充分な知識と徳を備えた人を養成する、それが大学寮の目的である、といわれています。さらに第三条になりますが、

第三条 大学寮ノ学科ハ本科第一部本科第二部及研究科トシ別ニ安居ヲ設ク

（同前）

という条項がたてられます。大学寮は第一部本科、第二部本科と、それからその上に研究科というものがたてられて、別に安居が設けられます。今も安居はありますね。安居は春と秋と、ご住職たちが高倉学寮に集まってその人たちに對して特別講義が行われていくわけです。その安居が大学寮の全体の中の構成に規定されていくのです。

ところがその次の年の明治二十八年になりますと、この安居に加えて、宗乗専修院というものが追加されます。したがって、大学寮は本科第一部、本科第二部、研究科と、それに加えて安居と宗乗専修院と、これだけが大学寮の内容になります。これは、今の私たちの感覚からすると、第一部・第二部が文学部に相当するところ。研究科は修士課程に相当するところ。さらに宗乗専修院というのはその上の博士課程にあたりと考えられます。そういう形で大学寮を宗派が設置していくわけです。

ところが、先程申しました沢柳政太郎氏をはじめとする開学派の人たちは、尋常中学等の要職に就いて、これから学事全般について責任を持つてその改革を進めていこうとする矢先に、本山との軋轢の中で実は解職されていきます。つまり、急進的な革新的な思想を持った人たちが、宗門の学事を振興していこうとしたことに対して、本山の守旧派、いわゆる江戸の宗学を勉強してきた勢力が巻き返しを図って、新しい革新的な人たちを解職してしまふ。そしてせっかく要請した沢柳政太郎氏を結局辞めさせてしまふ、というような事態になります。それで本山当局と清沢満之らを中心とする急進派とが、ある種非常に緊迫した状況になっていくわけです。そして、ご存じのように明治二十九年に

は清沢先生たちをはじめとして、例えば稲葉昌丸氏であるとか、清沢先生の友達ら六名が洛東白川村に教界時言社を  
 おいて白川党宗門改革運動に突入していくわけです。

今まで述べてきたことは白川党宗門改革運動のすぐ前の出来事でありますから、急進派の運動が激しくなっていく  
 中で、宗門当局も自分たちは学事については一生懸命やっているのだという、一つの提示をしなければならぬ。そ  
 のために明治二十九年に今まで定めてきた大学寮というものを廃止して、大学寮を二つに分けます。一つは真宗高倉  
 大学寮。もう一つは真宗大学。今まで大学寮としてあったものをこの二つに分けてしまふわけです。そして本科第一  
 部、本科第二部、それから研究科、それを真宗大学に。そして宗乗専修院と安居を真宗高倉大学寮というふうに分  
 つに分けていきます。そのときに真宗大学という名前が初めて生まれるわけです。ところが今申しましたように、本  
 山当局はある種の、政治的な意図で学事に関心を払っているのだというポーズをとろうとてやりましたので、  
 実際真宗大学という名前が生まれますけれども、左の資料のようになっていきます。

第八条 本科両部ノ学科程度ヲ定ムルコト左ノ如シ

(明治二十九年・真宗大学条例)

本科第一部				學科程度			
國文漢文	餘乘附科	餘乘	宗乘	一週時間	第一年	一週時間	第二年
三	三	二〇	七祖聖教	三	三	二〇	三
國文	因明	俱舍	同上	三	三	二四	三
三	三	三	唯識	三	三	二四	三
諸經子書	律宗要旨	天華台嚴	祖釋	三	三	二四	三
	密禪要旨	同上	同上				

	哲學					
又三〇 又八三	四		倫理學			
又三〇 又八三	四		哲學史			
又三〇 又八三	四		同上			
又三〇 又八三	四		哲學史			

本科第一部							本科第二部								
	哲學	科學	數學	國文漢文	餘乘	宗乘									
	四	四	二	五		十五	時一週								
	心理學	智力發達史	生物理	高等數學	國史文	俱舍	七祖聖教	第一年							
	四	四	三	四		十五	時一週								
	論理學	哲學原理	生物理	同上	諸國子文	唯識	同上	第二年							
	六						二四	時一週							
	倫理學史	哲學史				天華台嚴	七祖聖教釋	第三年							
	六						二四	時一週							
	美學宗教哲學	哲學史				同上	同上	第四年							

〔條規學則集1・2(三三〇頁)〕

そして、本科第一部と本科第二部の学科程度、学科目が記されています。それを見ると分かりますように、名前は真宗大学になりましたが、明治二十七年に大学寮が制定されたときのカリキュラムをそのまま踏襲しています。だから

従来の大学寮と実質は何も変わっていないことになります。さらに、その時の真宗大学は、あの魚棚の大学寮です。あの地にそのまま校舎もあったのです。法律としては真宗高倉大学寮と真宗大学という二つに分かれています。実際の教室は今まで通り、魚棚にあった従来の大学寮を使っている。それから真宗大学には学監と教授を定めるという法律的な職責も設けられています。実際には学監は全然任命されていません。さらに真宗学と仏教学の教授は、高倉大学寮の講師、副講、擬講がそのまま授業をやっています。ついですが事務員も前のままです。事務員は三名いるのですが、二名は高倉大学寮の事務があたる。一人だけは新しい事務があたるというものでした。

したがってこれまでの大学寮と実質何も変わっていないのに法制上、真宗大学というものをあえてたて、真宗高倉大学寮と分けた。しかも真宗高倉大学寮の方が博士課程に当たるわけですから、一段高い位にあつて、講師・副講・擬講といわれる人たちが授業をする。だから、真宗大学とは名前だけで実質は何もないのと同然なのです。ですからこれは革新的な清沢先生たちにしたら、納得いくはずがない。清川円誠氏の言葉に依りますと、「宗門の耳目を欺くため」の見せかけだけの改正であると、非常に強い言葉で非難をする。そういう形でしかながら、名前としては真宗大学というものが初めて生まれるわけでありませぬ。

それで宗派のいわゆる江戸時代の宗学を伝統したまま真宗大学が生まれてくるのですから、清沢先生たちはご存じのように白川党宗門改革運動へと突入していくのです。そして『教界時言』という機関誌を発刊して、宗門、あるいは日本の全体に自分たちの趣旨を訴えかけていくわけです。その『教界時言』発行の趣旨が明治二十九年十月三十日に発行されます。ここを少し読んでみます。今までのいわゆる宗学というものとは全く違った、清沢先生たちの願いが表明されています。そこには、

東西両洋の文化は、各一連の系統を成し、二條の潮流判然として其の状勢を異にするものあるが如し。(中略)  
今や等しく我が邦に会し、共に我が邦固有の精氣に同化せられて、我が大日本帝国の文化となり、漸く將に其の

光輝を宇内万邦の上に煥發せんとす。是れ豈に世界的統一的文化に非ずや。嗚呼、生を此の聖代に享け、斯の世界的統一的文化の原造者たり發揚者たる者、抑々何の幸榮ぞや。〔全集〕四・一七六

こういう言葉があります。つまり東洋の文化と西洋の文化はそれぞれ独自の伝統を持っている。その文化が初めて日本で一つになって、今、動こうとしている。そのときに自分は生まれてきた。「世界的統一的文化の原造者」と言うのですから、西洋の文化と東洋の文化を調和しながら生きて行かなければならないのがこれからの日本の情勢である。その中でどのように文化を統一していくかということが、当時の日本人全体が持っている課題でもあったわけです。したがって清沢先生もそのことを言っているのです。

そして次のように言います。

余輩は一般国民としては、国民相当の論議を提起することあるべく、一般宗教徒としては、宗教徒相当の見解を開陳することあるべく、一般仏教徒としては、仏教徒相当の考察を揭示することあるべきなり。唯だ余輩はかの世界的統一的文化の一大要素たる宗教の問題を攻究し、由りて以て余輩の職司を尽さんと欲せんには、先づ余輩所属の宗門たる大谷派の實際的方面を主本として立言するの順序を得たるを信ずるなり。〔全集〕四・一七七―一八と、あります。要するに、国民としてなら国民としての意見を言うことが出来る。あるいは宗教者としてなら一般の宗教者としての意見を言うことが出来る。しかし一般的な意見を言うのではなくて、西洋の文化と東洋の文化とが一つになっていく日本の状況の中で、実際にその文化を統一的に生きていくには何が必要か。それを「世界的統一的文化の一大要素たる宗教の問題を攻究する」と言うのです。つまり、東洋と西洋の文化を一つにして生きていくには、どうしても宗教が必要である。その場合に、自分が立っている大谷派の宗門から日本あるいは世界の状況を見ていきたい、というのが清沢先生の立場であります。だから、これまでのように宗門を単なる組織と考えて、宗派をどう護持していくかというような狭い真宗という考え方ではなくて、世界全体を包むような視野を持って、大谷派の仏教に立つ

ていきたいのだ。こういう先生の真宗という仏教の視野の広さですね。その辺をご了解いただければと思います。その次の文章ですが、

況んや大谷派本願寺は、余輩の拠つて以て自己の安心を求め、拠つて以て同胞の安心を求め、拠つて以て世界人類の安心を求めんと期する所の源泉なるに於いてをや。

〔全集〕四・一七八

こういう文章があります。これは『教界時言』発行の趣旨の中の、先の文章のすぐ後にある文章です。つまり清沢先生が大谷派の精神に立って、西洋と東洋の文化を統一的に見ていくのだと言っているわけですが、その大谷派の精神とはどういう精神かというと、それは「世界人類の安心」の帰依所であるということです。大変広い真宗理解です。広いというよりそれが宗祖の真宗理解です。親鸞聖人が真宗という言葉を使う場合には、教団とか宗派という意味で使った箇所は一箇所もありません。もともと宗祖も人類の帰依所として使われたものですから、清沢先生もその精神を引き継いだわけです。宗派の学とか宗派の教化という狭い意味で真宗を考えるのではなく、東洋と西洋の人々が一緒に立脚地としうるもの、それこそ真宗という仏教である、という主張をここでしているわけです。改めて言うまでもないことですけれども、これはとっても大切な視点であると思います。

そういう意味で、今までの教学や宗派の当局者たちは、先ず第一に、宗門護持、あるいは教団の護持を考えて、宗門を教団の組織として考えるのがほとんどなのです。だから、学問も宗派の宗学として外の世界にはあまり通じていけないような学問を発想している、そこに宗門の当事者と清沢先生との間にはずいぶん大きなずれがある。それは、根本的には真宗という仏教の理解の違いだと思います。だから清沢先生には、それまでとは全然違った志願というか、願いがあるということが分かります。

したがって清沢先生はそういう宗門の当局者、あるいは江戸の宗学の人たちに対して非常に厳しい言葉で批判をすることになっていきます。その一つが次に挙げております文章ですが、ちよつと読んでみます。

然れども余輩の称して教育と為すものは、所謂精神的教育にして、かの記誦詞章の学には非ざるなり。記誦詞章の学は死学のみ。死学は活ける知識を産し、活ける道徳を生ずること能はざるなり。識見や氣節や正義や博愛や胆勇や力行や、皆な死学の産する所に非ず。其の之を産すべきものは一に精神的教育に在り。

〔真宗大学新築の位置に就いて〕『全集』四・二七二

と、言います。つまり、「記誦詞章の学」というのは文章を書いたり文章を読んだりすること。いわゆる学問です。これは直接的には宗学のことを言っています。そういう宗学は「死学」である。死んだ学問は生きた知識を生まない。それから、「道徳」を生まない。さらに「識見」「氣節」「正義」「博愛」「胆勇」「力行」、こういうのは全部、明治の時代を生きていく力です。簡単に言えば、この世をどのような方向でどうして生きていくかという、「識見」や「道徳」です。知識ではなくて見識ですね。そういうものを生む学問が、今清沢先生が言おうとしている「精神的教育」なのです。

人間が生きていこうとする時には、現実的には非常に厳しい状況を生きていかなければならない。そのときに何を指すのか、どの方向に向かって生きていいいのかということが、実際に生きている人間の問題なのです。それに対応するような学問でなければ、真宗の学問とは言わないのだ。「記誦詞章」といわれるこれまでの宗学は、江戸時代の鎖国状態から日本全体が大きく変わって、西洋の学問がどんどん入ってくる状況の中では死学というほかはない。古い道徳が壊れて、一体どうしたらいいかわからない日本の状況の中で、生きていく力にならないようなものは学問ではない。死学なのだ、という指摘です。これは大変厳しい指摘ですが、真宗学を学ぶ者としては清沢先生が指摘していることに、お互いに心しなければならぬと思います。

したがって、宗学を伝統してきた人たちから言えば、逆に、改革派の人たちはどうも従来の宗義宗学、いわゆる伝統的な宗義と先輩の説を乱す。特に最近そういう輩が増えている、だからなんとか宗門の学問をきちんと守っていか

なければならぬという、ある種の責任を感じるわけです。だから宗学を中心として宗派を守っていかなければならぬということ、老学者たちが貫練会という組織を作ります。その貫練会の趣旨文を読んで、清沢先生は「貫練会を論ず」という批判の文章を書いておられます。それが次の文章です。

余輩は以上分解する所に依りて、かの趣意書中、少なくとも左の四事を包含することを知る。

一、貫練会は、現時真宗の徒にして、宗義の改竄を企図する者ありとすること。〔全集〕四・三〇三

つまり、最近真宗の徒と名乗っている者の中に、宗義を「改竄」というのですから、変えてしまふ。新しい考え方で、今までの伝統的なものを変えようと意図している者たちがいるということが一つです。それから、

一、貫練会は、其の所謂先輩の軌轍に合せざる宗学上の解釈を以て、邪義不正義とせんとするものなること。

(同前)

要するに貫練会は、先輩の言っている宗学上の解釈を楯にとつて、それに合わないものは駄目だと非難する。そういう態度を持っていると言っています。それから三番目ですが、

一、貫練会は、宗学上に於ける学者の見解に対し、自ら真偽邪正を決判するを得とするものなること。(同前)

貫練会は学問をしている学者の見解に対して、貫練会自身が真であり、その他のものに対して偽であり、邪であり、正であるということを決断することが出来ると思つている。それから四番目。

一、貫練会は「同志を糾合」して其の所謂邪義不正義を撲滅せんとするものなること。〔全集〕四・三〇四

貫練会は同志を集めて、邪義であり不正義であると決めて「撲滅」と言うのですから、それを排除し潰していこうとするような会であること。清沢先生は貫練会の趣旨文を読んでその問題点を、この四つにまとめておられます。そしてその次に、

蓋し其の第一は、宗義と宗学とを混同したる謬見に出で、其の第二、第三は、此の謬見に基因したる誤解に発し、

而して其の第四は党同伐異の精神を實行せんと欲するものに外ならじ。

(同前)

と、言います。ようするに貫練会は、宗義と宗学とを一つに混同し、それを金科玉条にたてて、他を批判し排除していこうとする。そういう形になっていると言っています。そしてその次に

夫れ宗義と宗学とは截然其の區別あり。決して混同すべきものに非ざるなり。宗義は宗祖の建立に係り、宗学は末学の討究に成る。一は所釈の法門にして、一は能釈の言句なり。故に、宗義は一定不易ならざる可からずと雖も、宗学は發達變遷あるを妨げず。

(同前)

と、言います。つまり「宗義」と「宗学」とは、はっきりと区別しなければならない。「宗義」は親鸞聖人の教えであつて、「宗学」はそれを学ぶ者の学問です。その末学の学問と親鸞聖人の宗義を混同して先輩の説を立てるといふ誤りを犯している。したがつて宗義、つまり親鸞聖人の教えは、絶対に変わらないものである。しかし宗学、つまり末学、私たちの学問のことです。これは時代の課題とか、そのときの人間の問題等々によつていつでも変わりうるもので、それを絶対に変わらないものとしてたてるところに間違いが起こっている。こういう指摘なのです。そして、我が真宗の宗義は載せて立教開宗の聖典たる広本六軸の中に在り。其の文柄として日星の如し。誰か之を動かすを得んや。かの宗学なるものは、此の宗義を学問の方面より討究するものにして、其の解釈の深淺優劣如何に拘らず、均しく末学の私見たるに過ぎざるなり。

(同前)

と、あります。したがつて宗義は、親鸞聖人がお書きになつている『教行信証』の中に、宗祖の本意がある。ところが、宗学はそれを学ぶ末学の学問ですから、その学問には浅い深い、優劣はあるかもしれないけれども、それはおしなべて宗学であつて、宗義とは別である。この「貫練会を論ず」の文章の中にありますが、香月院深励といおうと、円乘院宣明といおうと、親鸞聖人から比べたら末学の学弟である。だからその説をいかにも宗義のようにたてていくことは大きな誤りである。こういうことを清沢先生は言おうとしているわけでありませう。これはよく分かる指摘だと

思います。その次に読みます。

要するにかの貫練会一派の諸氏が、先輩の一字轍を標準として、是非正不を決せんとするが如きは、不法の甚だしきものにして、毫も其の理由なきものなり。而して諸氏が此の迷窟の裏に彷徨して、自ら小にし、広闊なる自由討究の天地に遊びて、大いに宗義を発揮すること能はざる所以のものは、蓋し其の宗義と宗学とを混同するの謬見に基因せずんばあらず。(中略) 故に宗学の境界に於いては討究上充分の自由を与え、決して束縛を加ふべきものに非ざるなり。

〔全集〕四・三二〇

と、あります。親鸞聖人の教えをしつかりよく聞いて、先程申し上げたような状況が日本の現実ですから、そういう人間の問題をよく見ながら自由に討究していく。その討究の中で親鸞聖人の「宗義」を大いに明らかにしていく。それが「宗学」、いわゆる学問というものであって、学問には自由というものを保証しなければならないという主張です。これは清沢先生らしい主張ですが、言うまでもなく、草創期の東京大学で西洋の哲学を学んだからだと思われる。この文章には、それまでの宗学のあり方とは全く違った学問の方法というものに触れた、清沢先生の感動がこめられているのだと思います。そしてさらにその自由な学問の立脚点を述べて、

是の故に、真宗の徒たる否との分かる、所は、宗義其の物を信奉すると否とに在り。

〔全集〕四・三〇五

自由討究の立脚点は、親鸞聖人の教えを信奉するか、そうでないかに在るのであって、

宗学上の学轍を遵守する否とに在らざるなり。

(同前)

先輩の学轍を楯にとつて、それを遵守していくことが学問ではないのだと、言っています。

これも大事なことだと思います。多少耳が痛いと思えますか、私共が論文を書くとき等に注意をしなくてはならないことです。例えば清沢先生の「開校の辞」、あるいは曾我先生、金子先生の学説を前提にして、論を運ぶような学問のあり方は、近代教学という形をとつても学問ではないと言っていることになります。大変厳しい指摘だと思います。

います。つまり、先輩の学轍を理念として先に立ててしまうと、現実には常に動いているわけですから、合わない現実が起るとそれを批判しなければならなくなる。さらに合わない現実を排除しなければならなくなる。そういうものが学問と勘違いしたら大間違いであると、言おうとしている。だからこれは単にその当時の宗学に対する批判だけではなくて、私たちが仏教を学ぶときに、理念的なものを立ててしまったときに起る問題、これは大きな問題だと思います。だから、もし私たちが先輩の学轍などを楯にとつて、それを前提に立論していくようなことをやっていったならば、近代教学という形はとつていても、清沢先生の学の方法とはまったく違うことになります。それは結局、自分の学問に合わないものを批判し、排除することになるだけで、それ以上のものを何も生んでこないということになります。それは学問ではないことです。もし今私たちがそういう態度で仏教を学ぶとすると、それは近代的な様相をとつた宗学であると言えない。清沢先生はそうおっしゃっているわけです。だからそれは大変厳しい指摘であるけれども、私たちが心して学ばなければならないことであると思います。

それではそういう学轍を立てない、いわゆるここで言う「宗義其の物を信奉すると否とに在り」という立脚地とは何か。宗義そのものを信奉するということはどういうことか。つまり、親鸞聖人の本意にかなうということとは一体どういうことかということになります。それは、いみじくも『歎異抄』の中で唯円が尋ね言及していることだと思えます。つまり、唯円が亡くなった後、もし異義が起つた場合には、親鸞聖人の御本意にかなう聖教を読みなさいと。こういう指摘ですね。そこに

故聖人の御ころにあいかないて御もちいそうろう御聖教どもを、よくよく御らんそうろうべし。おおよそ聖教には、眞実権仮ともにあいまじわりそうろうなり。権をすてて実をとり、仮をさしおきて眞をもちいるこそ、聖人の御本意にてそうらえ。かまえてかまえて聖教をみみだらせたまうまじくそうろう。

（『聖典』六四〇頁）

こうあります。つまり、親鸞聖人のころにかなう聖教を読みなさい。その場合に聖教にも眞実の聖教と方便の聖教

とがあります。だから親鸞聖人の本意にかなう真実の聖教をとってよく読むこと、それが大切です。こう言っている。そして、その真実の聖教を選ぶ場合の「大切の証文ども、少々ぬきいでまいらせそうろうて、目やすにして、この書にそえまいらせてそうろうなり」と言います。そして、

聖人のつねのおおせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよ」

〔聖典〕六四〇頁

こういう親鸞聖人の言葉です。つまり、親鸞聖人の本意にかなう聖教を選ぶ場合にはこの言葉を常に思い出しなさい。あの『大経』に説かれている、法蔵菩薩が五劫もの間かかって、本願をたてて下さったご苦労は、よくよく考えてみると私一人の為にたてて下さったものである。だからあらゆる業を持った人間を助けんと思つてたてて下さった本願がどれ程ありがたいか。こういう親鸞聖人の謝念です。本願の教えに対する謝念、感動ですが。

と御述懐そうらいしことを、いままた案ずるに、善導の、「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」という金言に、すこしもたがわせおわしまさず。

〔聖典〕六四〇頁

とあります。これはいわゆる機の深信と私たちは教えられてきている文章です。これは本願の教えに照らされて、人間まるごと目覚めた、目覚めをあらわす言葉です。あまり詳しく言う必要ありません。本願の教えに照らされて、人間のあり方に丸ごと目覚めた、目覚めをあらわす言葉。つまり、人間を超えた仏になろうとしているわけですから、人間の努力や能力を積み重ねて仏になるはずがない。人間を超えたものになろうとしているのに、人間の能力でなるはずがない。それはちょうど嘘を重ねて本当にしようというような話になるからです。人類は地獄一定を生きるもの、それが人間なのだというのはつきりとした人類全体の目覚め、それをあらわす言葉をここにあげているわけです。つま

り、聖人のご本意にかなうとは、宗義を信奉するということはどういふことかと言うと、人間全体の目覚めに立つといふこと、自力無功の目覚めに立つといふこと、それが宗義にかなうといふことだと清沢先生は言っていることになります。

当時、言うまでもないことですが、西洋の思想がどっと入ってきました。それは人間至上主義でしょ。人間の努力によって発展していくという、人間を全面的に肯定していく風潮、その中であつて、この自力無功、地獄一定という立場、立脚点は、これは仏教の見事な智慧なのです。人間を見抜いていく本願による智慧。それに立つてではないかといふことを清沢先生は言っていることになります。

これも清沢先生の「我が信念」の有名な言葉ですから、皆さんご存じの通りであると思います。

私の信念には、私が一切のことに就いて私の自力の無功なることを信ずると云ふ点があります。此の自力の無功なることを信ずるには、私の智慧や思案の有り丈を尽して、其の頭の挙げやうのない様になると云ふことが必要である。此が甚だ骨の折れた仕事でありました。(中略)論理や研究で宗教を建立しやうと思つて居る間は、此の難を免れませぬ。何が善だやら悪だやら、何が真理だやら、非真理だやら、何が幸福だやら不幸だやら、一つも分るものではない。我には何にも分らないとなつた処で、一切の事を挙げて、悉く之を如来に信賴すると云ふことになつたのが、私の信念の要点であります。

(『全集』六・三一九—三〇)

こういういわゆる自力無功の立脚点と、そこからもう一度人間と社会を見直す目。それは近代の西洋の考え方の中にはないだらうと思ひます。それは仏教の非常に優れた智慧なのだと思ひます。そこに立つて自由な討究をしていく、それこそが学問というものであると、清沢先生は言おうとしているのだと思ひます。

したがつて、教育といつてもいわゆる記誦詞章の学問による教育とは違ふ。もちろん聖教を読むことはとても大切なのですが、聖教を読むときにやらなければならぬ教育とは何か。それを清沢先生は「真宗大学新築の位置に就いて」の中で次のように言ひます。

一派の革新を図るの要は、僧侶の宗教的精神を振作するに在り。而して僧侶の宗教的精神を振作するは、精神的教育を施すの外他に奇策あることなし。制度を改良する必要ならざるに非ず。宗紀を振肅する亦た固より急務とする所、然れども概していへば是等は消極的手段に過ぎず。其の積極的方法は唯だ精神的教育の一あるのみ。

〔全集〕四・二七二

要するに制度やその他を整えることは大変大事なこと、必要でないとは言わない。しかしもつと大切なことは、親鸞聖人の教えにはつきりと自分全体の目覚めを持つような精神的な教育、そのことがまず第一に大切なのだと、言っています。ですから、清沢先生が目指している学問は、宗祖の聖典をよく学びながら、今言った自分自身の目覚めを得、自力無功というところから、人間と社会をもう一度見直していくような態度で、自由討究という学問を進めていくこと。それが清沢先生が目指した学問なのです。

ですから、宗祖の聖教を読むこと、これはとても大事なことなのですが、もつと大切なことは、この現実をよく見ることです。今どうなっているのかという人間の課題の方をよく見ることです。これは反省を込めて言うのですが、学問をするときに現実を見ないで、すぐに答えの方を出そうとします。そうすると浄土は人間の立脚地であるとか、浄土は四海の内皆兄弟とする、人間の関係を回復する場所であるというようなことを言うわけです。それは大事なことなのですよ。それは大事なことなのだけれども、それを言う場合には一人人間のどういう現実の問題があるのかということの方を押さえないならぬ。そうでなくて答えだけを出した場合にはそれは宗学と変わらないことになる。なぜなら答えは、お釈迦さまが覺りを開いた時から与えられているからです。仏教は人間の立脚地と人間の関係を回復するということは、はじめからお釈迦様が答えを出しているのである。そうじゃなくて、人間が生きていく場合に、今の現状の中で一体私たちはどんな問題を持っているのか、どういうことに苦しんでいるのか、何が解ければ生きていく方向が見えるのか。そういう現実の人間の問題をよく見なければならぬ。それを見る智慧がさつき言っ

た清沢先生の自力無功という立脚地である。こういうことになるかと思ひます。

もう少し言葉を足せば、人間の問題は、本当は人間には分からないのです。人間の問題を本当に見抜いているのは、本願です。その本願に見抜かれている人間の闇が、その通りでありましたと、頭が下がるのが、機の深信でしょう。だから、その機の深信の智慧に立つて現実をよく見るのだと思ひます。

したがって真宗大学をなぜ東京に移転したかについては、いろいろ議論があります。例えば真宗大学を東京に移転するについて、本山と二・三の約束を交わします。その一つに一カ年二万五千円本山からお金を出す。一遍に三年分出して、その金に本山はどんなことがあつても手をつけてはならないという約束をします。それからもう一つは教育方針についてです。大学の教育方針、あるいは学科課程については、本山は一切口出しをしてはならないという約束をします。だから京都から東京に真宗大学が移転したのは、本山の監督下から逃れる為である、ということが通説として言われます。そのことはそれで間違ひではないと思ひます。しかし清沢先生はこう書いています。明治三十年七月二十九日付「真宗大学新築の位置に就いて」、ここに、

其の新築は、東京を先とするを可なりと信ず。

〔全集〕四・二七三

つまり、京都と東京とどちらに建てるか。それは二つとも建てたらいいのだけれども、まずは東京に先に建てなければならぬ。

試みに少しく其の理由を述べん。

と、言われて、

天下の事、社会の大勢に伴ふものは榮え、之に伴はざるものは衰ふ。東京は吾が邦文化の中心にして、社会の大勢の最も早く現る、地たるのみならず、又吾が邦に在りて海外の事情を觀察するに最も便利なる処なり。故に宗教家にあれ、教育家にあれ、政事にあれ、此に居る者は最も早く其の大勢を知りて、社会の進歩に伴ふことを

得、其の地方に居る者に対して、常に機先を制することを得るなり。

(同前)

とあります。そして、だからキリスト教はたくさん東京に行っているという文章が入っています。そこは中略しています。それに対して

独り仏教は依然として京都の小天地に踞踏し、

(同前)

「踞踏し」というのはびびっているという意味です。京都の地でびびりながらおると。

只管其の旧態を維持せんことに汲々たり。是れ彼の益々勢力を社会に得るに反して、此の益々勢力を社会に失ふ所以なり。故に今後の仏教は少くとも教育の中心を東京に定めざる可からざるなり。

(同前)

とあります。

ここにはさつき申し上げましたような京都の地から東京の地に移るのに、本山の干渉を防ぐためとか、本山の規制から逃れるためとか、そういう言葉は一つもありません。そうではなくて、現実を見よと。要するに小さな宗派の中に閉じこもって、宗派の中だけに通用するような学問、それを宗学と言ってきた。そして愚夫愚婦の教えとして今まで伝統されてきたけれども、今はそんな学問ではもう通用しない。西洋の文化がどんどん入ってきて東洋の文化と接触しながら、日本人はどうして生きていったらいいのか分からないような状況ではないか。そういう現実をよく見るために東京に真宗大学を建てるのだ、と言っているわけです。ですから私がさつき申しましたように学問というものは答えを出すのではない。問いの方を、現実の問題の方ですね。特に仏教というものは一人人間がどうして生きていったらいいのかという、そういう現実の問いの方をよく見抜けと。そのために真宗大学を東京に建てるのだ、とおっしゃっている。それ以外のことは言っていません。ですから、そこがとても大切なことなのだと思います。

したがって真宗大学の学科科目、それもかつてないような意味を持ってたてられます。ここに載せております。詳しくはよく見ていただいたら分かります。

真宗大學本科・予科學科課程

哲學	餘乘	宗乘	學科	學級	天台科
四	三十八	四			
哲學史	佛教概論	天台釋		一年級	
四	三十八	四			
社會學史	華嚴台要	同		二年級	
六	三十八	四			
倫理學史	密同教要	同		三年級	

合計	英語	哲學	餘乘	宗乘	學科	學級	宗乘科
二二	三	四	九六	六		每週時間	
	講讀	哲學史	佛教概論	七祖釋		一年級	
二二	二	四二	八二四	八六			
	同上	社會學史	淨土西華 教靈兩家 史要旨嚴	列祖系統釋		二年級	
二二		六二三	八二四	八六			
		倫理學史	同密同 教要 上旨上	同同上		三年級	

(明治三十二年六月十三日)

餘乘	宗乘	學科 學級	性 相 科
十二 三二六	四	時間 每週	
佛因俱 教概 論明舍	祖 釋	一 年 級	
十二 二二八	四		
天性俱 台舍 相及 要唯 旨史識	同 上	二 年 級	
十二 二二八	四		
華同唯 嚴 要 旨上識	同 上	三 年 級	

合計	英語	哲學	餘乘	宗乘	學科 學級	華 嚴 科
二 三二	三	四	十二 三八	四	時間 每週	
	講 讀	哲 學 概 論 史	佛 教 概 論 嚴	祖 釋	一 年 級	
	二	四	十二 二二八	四		
	同 上	社 會 學 史	天 台 要 旨 史 上	同 上	二 年 級	
二 三二		六	十二 二二八	四		
		教 倫 育 理 學 學 史	禪 宗 要 旨 上 上	同 上	三 年 級	

合計	英語
二 三二	三
	講 讀
二 三二	二
	同 上
二 三二	

合計	哲學	經濟學	歷史	英語	國文	餘乘	宗乘	學科	真宗大學 豫科學科 課程表
								學級	
二八	三		二	四	五	九	五	時間 每週	
	論		佛 教 歷 史	講文作 翻	日講 本 文 學	佛俱 舍教 々々 (頌理 疏)史	論三 經 交 際	一 年 級	
二八	三	二	二	四	三	九	五	同上	
	心理	經濟 通 論	各國 宗教 史	同同修同 辭 上上學上	同同 上上	三法同 相論 (成唯識 玄義論) 上	選七 祖 擇 系 集統	二 年 級	

合計	英語	哲學
	三	四
	講 讀	哲學 概論 史
二二	二	四
	同上	社會 學 史
二二		四
		教倫哲 育理學 學學史

特に四学科、宗乗科・天台科・華嚴科・性相科のこの四つの学科に分かれます。宗乗科は言うまでもなく真宗学です。天台・華嚴・性相は、仏教学です。したがって真宗大学は、今で言えば、真宗学と仏教学の単科の大学として建てられたわけです。予科というのはこれは大学の本科に入る前に、予備的に、大学の授業に耐えられるような学力を身につけるためにやる授業です。その予科の方をちよつと見て下さい。宗乗毎週五時間。それから余乗九時間。仏教学の方は、インド仏教から日本仏教まで非常に範囲が広いですから、多くの時間数を取っているのだと思います。それから国語漢文これは五時間。これは宗乗と同じ時間ですね。その他に英語四時間。これは講読・文法・作文・翻訳、こうありますので、この予科で二年びつちり英語をやつて多分原書が読めるくらいまで勉強するのだと思います。それから後、歴史・哲学等々の授業があります。

本科を見ていただきますと、宗乗の方、先ず見ていただきます。これは真宗学ですが、真宗学は、毎週六時間、七祖聖教その他で六時間あります。余乗は九時間。そして哲学。これは西洋の思想四時間。そして英語三時間というようになっています。宗乗ではこういう学科目です。

天台科の方。仏教学の方を見てみますと、宗乗、親鸞教学四時間です。それから専門の仏教学が十一時間。これは当然多いわけです。それから哲学が四時間。ですから親鸞教学と西洋の哲学を学ぶ時間とが同じ時間あるわけです。そして英語が三時間と、こういうふうになっています。仏教学の方全部そうになっていますので、親鸞教学を学ぶ時間と同じ時間数だけ哲学を学ぶということになっています。それから三年次になりますと、さらに哲学の時間が増えて週六時間になっている。これもよくご覧になって下さい。

このように、今までのように、宗門護持のために哲学を学ぶ。そういうものじゃなくて、今言った自力無功ということに立って、西洋の思想を見直し自由討究をする。だから、真宗大学は西洋の思想と東洋の思想との世界的視野

を持った思想研究の大学である。そのような大学として真宗大学を東京の地に開学するのです。ですから、真宗大学は京都にあったから、そこが開学ではないかというのではなくて、今のような近代的な大学として、さらに清沢先生の学問の精神が生きた大学として開学をされたのは明治三十四年の十月十三日、この時を以て開学とするのだというにはそういう意味があると思います。そして清沢先生のことがこのように伝えられております。

清沢先生は常に真宗大学が東京に来れば、東京の如き、物質主義、積極主義に反して、精神主義、消極主義の一  
大活泉を得たと談じ居られ候。  
〔全集〕八・三四八

これはすごい自信です。つまり真宗大学が東京に来たのだから、東京のような物質主義、積極主義、これは西洋の近代的な合理主義、科学主義、そういうものも含めて言っているわけです。それに対して精神主義、つまり親鸞の教えにしっかりとらなずいた信心。それから消極主義、これは自力無功という智慧によって、そういう物質主義や積極主義の闇を見抜きながら、

兎に角、われらは当地に來りしより、一層われら真宗大学が世界に於いて、日本に於いて、働くべき責任の重き  
を感じ申候。  
〔同前〕

と言います。その意味で真宗大学は非常に重要な責任を持っている。世界を見抜いていくような責任を持っているのだと述べておられます。そのような真宗大学を、東京に開学した。それが清沢先生の開学の精神です。さらにこうあります。

先生嘗て真宗大学を論じて曰く。この大学は世界第一の仏教大学たらしめざる可からず。他日欧米より仏教を学  
ばんがために日本に留学するものあらば、必ず先づ真宗大学に来るべし。  
〔全集〕八・四九〇―一

つまり世界的な視野を持った思想研究という。しかも真宗の自力無功という立脚地に立って思想研究をしていく、それが真宗大学の開学の精神であると。こういうことになります。

一応そういうことなのですが、本当はこれから少し申し上げたいことがあるのです。時間がもうありませんが、かいつまんで申し上げます。

つまり、真宗大学が開学されたと言いますと、私どもは、さすが清沢先生だと思えますけれども、実は私はこういう精神は簡単に理解しにくい。世間の中であって、出世間を頭揚していく学問は、非常に難しいことです。だからおそらく清沢先生は、これからの日本は学問の世界になるであろうということを見抜いて、真宗大学を建てました。ご存じのように私立で大学を名乗ったのは慶應大学に次いで真宗大学が二番目ですから。ですからこれから日本全体が学問の世界になっていくであろうということを見越して、学問として仏教を世界に公開していきたい。これはとてもよく分かるわけですが、これは逆に言えば大変危険な仕事なのですね。つまり仏教が学問になったときには、仏教のいのちを失うというのが、仏教の歴史が示していることです。ですからそれは大変に危険なこと。危険なことだけでも時代情勢がそういうふうに進んでいるわけですから、その中であえてその危険を冒して、学問として世界に公表しなければならなかった。そのときに大切なのは、さつき言った自力無功という仏教の智慧に立って学問をするか、それとも世間の立場に立って学問をするか、そこが全然違うわけです。だから出世間という立場、そこをどうしても確保していかなければならない。しかしながら世間の中であってそれをやるわけですから、それは大変困難を極めることです。

案の定、真宗大学が開校されてすぐに真宗大学はそういう問題に直面します。今日はもう時間がありませんので、言えませんが、関根仁応という主幹が清沢先生の精神を実現するために努力しました。しかしながら、その努力が前からの宗学の人たちとの間に溝を生んだ。さらに自力無功に立って自由な学問をする教授を清沢先生は任命します。例えば曾我量深、近藤純悟、多田鼎、佐々木月樵、これらの人たちは研究科の学生でした。しかし研究科の学生であっても、自力無功がはっきりしているという者でなければ、自由な学問に耐え得ない。ですから若かつたけれ

ども、その人たちを任命します。ところが学生にとっては当時いろんな学生がいるわけで、曾我先生よりも歳いった学生たちがいっぱいいるわけです。昨日まで「オイ曾我君」と呼んでいるのが、今日からいきなり先生というのは、それは許せないということで、学生たちの反発が起こります。

その中で例えばこういうことがあります。ちよつと長いけど読んでみます。

生徒の中には、かうして京都から東京に学校が移つたのだ、これから積極的に何でもやらして貰はねばならん、中学校の教員の免状位は当然此の大学で呉れても良ささうなものだ、といふことを云ひに、先生の所に行かうと云つてる学生がある。すると先生は、此の学校を東京の郊外に作つたところの精神は、此の学校を卒業した君達が、田舎の貧乏寺の住職になつて門徒を教導する、さう云ふ坊さんを作る為に此の学校が出来たのだ。東本願寺は、中学校や高等学校の先生を作る為に此の学校を作つてゐるのではない。中学校の先生になる様な人は御門徒の中に何ほでも出来る。さういふ人達を教へ導く坊さんが居らんのだ。此の学校を出た諸君はさういう有識階級の御門徒を親鸞聖人の御信心に導く様にならなければならん。かう云ふ様に訓誡をして居られるのであります。

〔全集〕八・五二八―九

大変よく分かるでしょう。つまり世間に生きる者は世間的な免許とか、資格、そういうものを身につけて当然なのだ。大学まで来たのだから常識です。ところが真宗大学はそうではない。出世間を学ぶところだ。世間を超えた学問をするところだということを強調するわけです。そしてこういう出世間を学ぶという精神は、この大谷大学の中にずっと流れていきます。例えば曾我量深先生、金子大栄先生のような方たちに引き継がれて流れていくけれども、一方でまた世間の要請に応えなければならぬ、そういう世間の大学としての要請がありますから、そこはいつも緊張関係を持ちながらずっと続いてきているのです。世間の中にあつて出世間を明らかにする学問、逆に言えば、出世間の学問によつて、世間の分際を明確にする使命を持った大学、それが真宗大学です。大学史を担当させていただきまして、

その点大変感銘をもって学ばせてもらいました。

例えば大正十二年でしたか私立学校令が出来ます。その場合にこの出世間を学ぶ真宗大学を国家の私立大学にすかさないか、という議論になるわけです。国家の大学になるということは国家の言うことを聞けということですから、国家の力でいつでもご本尊をおろせということになるわけです。ですから、国家の大学になるということは、非常に危険なことです。しかし、国家の大学になって世界の学界に真宗を公表しなければ、真宗という出世間と、世間との区別がつかないのです。

佐々木月樵先生がいつているとおり真宗という出世間の学問を世界の学界に公表するということは世界が悪いと、そんなことを言おうとするわけではない。そうじゃなくて、出世間と世間との分際をはっきりする。世間ではここまでしかやれない。独立など出来ない。いくら地位や名誉があってもそんなものでは本当の独立など出来ない。出世間というところで人間の本当の独立がある。だから出世間と世間との分際をはっきりさせる。そのためにどうしても学問として真宗・仏教を公開しなければならぬ。

しかし、国家の大学になれば、名号をおろせと言われるかも知れない。そうなったときにどうするかという議論があります。草創の若い佐々木月樵先生は教授会で手を挙げて、国家が名号をおろせと言うのなら、名号は講堂に付ける必要はない。校門の木の上にかけてもいいではないか。こう言っておえて国家の大学になっていこうとするわけです。それはつまり名号は、それ自体に意味があるということもありますが、それ以上に名号に帰した人間が大切なのだ。つまり名号に帰しているその機の深信、その信心、それが私たちの立脚地であって、そこにあるならば、どんな状況の中にあっても現実に即して出世間という意味をはっきりさせていけるのだ。

つまり理念を建てて原理主義になってしまおうと現実を批判することしか起こりません。ここからは何も生まれてこない。そうじゃなくて、どんな現実になろうと現実に即して、自力無功という智慧で現実を見抜きながら、親鸞聖人

の仏教を公開していくことが出来るではないか。そういう勇氣ですね。そういう勇氣が大谷大学の中はずっと流れていると思います。これから情報化社会になるわけですから、どんな社会になるか分かりませんが、本当の人間が独立する情報とは何かということ、本願の智慧でもって見抜けなかつたら、宗門が世に捧げた大学にはならないと思います。

まだまだ申し上げたいことはたくさんあるのですが、今日は清沢先生の開学の精神を改めて確認させていただいて、私の学ぶ姿勢を正さなくてはならないと思つた次第であります。少し時間がオーバーしましたが、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。